

「しまなみ海道を日本最大の 海事産業の集積地に」



撮影：麻生祥代（村上アーカイブス）

ひらたに ゆうこう
平谷 祐宏 尾道市長

尾道市は因島、向島、瀬戸田などと合併し、造船関連産業に携わる従業員数が2006年に国内最多の都市となった。これを受けて“海事都市尾道”を標榜し、「海フェスタおのみち～海の祭典2012尾道・福山・三原～」も開催した。尾道市の平谷祐宏市長は「尾道にある造船所は多種多様で、船用工業、海運もあるのが尾道の海事都市の特徴」と説明。姉妹都市提携を結んでいる今治市とともに「しまなみ海道沿いを日本最大の海事産業の集積地としたい」と、瀬戸内海での海事産業の地位を高めていきたい考えを示した。

造船関連の従業員数が国内最多

“海事都市尾道”を打ち出した背景は。

「尾道は昔から、北前船の寄港地として、海を中心として発展してきたまちです。また造船産業が発展してきたまちでもあります。市町村合併により、2005年に御調町と向島町と合併し、翌年には因島市と瀬戸田町と合併してできたのが、現在の尾道市です。合併が終わり、2006年の事業所・企業統計を調べてみると、造船に携わる従業員数が日本の都市で

もっとも多いというのがわかりました。

尾道市が 4053 人と唯一 4000 人を超えていました。2 位が長崎市の 3985 人、3 位が神戸市の 3691 人、4 位は今治市の 3481 人、5 位は玉野市で 3388 人といった具合です。それぐらい海事関係で働いている人が多くいて、尾道の基幹産業になっているということが、データをまとめてわかったのです。造船を中心として、船用工業、海運が市の発展と雇用を生んでいて、海事産業が集積したまちなんだという認識を、まちづくりにきちっと持とうと思いました」

尾道が海に関わる産業都市というのは、いつから感じていたのですか？

「私は出身が岩子島で、もちろん周囲は海でした。そこから向島中学校に通っていて、学校の目の前に日立造船の工場がありました。教室にいても、カーン、カーンという工場の音が聞こえていました。校舎からは進水式の模様も見えていましたので、船台を滑っていく新造船のガラガラガラッという音も聞こえていました。だから友だちの中には、『ウチの父は造船所に勤めている』とか、近所の人々が造船関係の仕事をしているとか、という話はごく自然にありました。そのころから雇用という面でも大きな産業だったと思いました」

今治市とともに日本最大の海事産業集積地に

あえて海事都市と標榜したのは。

「合併してから『尾道はどんなまちなのか？』と聞かれて考えると、因島、向島、瀬戸田と、基幹産業が造船業だと思いました。それで『“造船都市”と言ったら』という人もいましたが、造船業だけだと、やや狭い範囲になってしまうし、“海事都市”と言った方が正確だと思いました。海事都市という言葉を使うことによって、造船や船用工業だけでなく海運もあり、海上保安庁や海技教育関係まで含め、海事産業に関わるあらゆる人たちを表すことができる。それに尾道には国土交通省中国運輸局の尾道海事事務所があります。以前、全国の海運支局の中で規模が大きい 5 大支局の一つが尾道海運支局（現在の尾道海事事務所）だったのです。それらも含めて、幅広い意味での“海事都市”が、尾道の特徴なんです。

海事都市という響きが尾道にはピッタリ当てはまっていると思います。たぶん“造船都市”と言っていたら、広がりがなかったでしょう。自治体が海事都市を標榜することは、自分たちへのプレッシャーにもなるのですが、海事都市と言い始めたことは適切だったと思います。

ただし海事産業に携わっていなければ、“海事都市”という言葉が聞き慣れないので、“海事都市尾道”は言い続けられないといけません。“海事都市”と言い続けたことで『海フェスタおのみち 2012』を尾道で開催できるようになったと思います」

今治市も海事都市を標榜している。

「瀬戸内海をはさみ、しまなみ海道でつながっている今治市とは姉妹都市の提携を結んでいます。今治市も海事都市だし、2 つの市が一緒になって海事都市を展開すると、しまな

み海道沿いが日本最大の海事産業の集積地となる。尾道市だけの海事都市という意味ではなく、姉妹都市の力をあわせながら、日本最大の海事産業集積地としてやっていきたい。そういう意味合いでも海事都市というのを使っています。

今治市とは姉妹都市とはなっていましたが、もともと海事都市ということにつながっていたわけではありませんでした。四国側の対岸のまちでしたので、姉妹都市提携を結んだ。しかし今では、今治市が『今治海事展』、つまりバリシップを開催して、尾道市の海事関係企業も参加して両市の相互交流ができていると思っています」

特徴は多種多様な造船所がたくさん

海事都市尾道を掲げたことでほかには、

「広島県の湯崎英彦知事が選挙公約に“瀬戸内 海の道構想”というのを掲げて当選しました。瀬戸内海の魅力を引き出して観光誘致を目指すものです。海の道構想により、海事産業の振興、海に関わる観光資源も含めて、尾道市は広島県と政策的にリンクできる。いろいろな形で県の政策を尾道市で展開できるのです。海事都市という表現を使っていなかったら、海のまちという意識を持っていなかったら、知事が言う海の道構想の意識もなかったかもしれないですね」

他の海事関係の都市と比べて、尾道らしい特徴は、

「造船業に関しては、一口に造船と言っても、いろいろな分野があることですね。尾道造船や内海造船など、大型船を建造する造船所から、特殊な技術を持った中小造船所など多くあります。

アルミ船の建造技術は、溶接が難しくて特殊な技術が必要です。ツネイシクラフト&ファシリティーズや瀬戸内クラフトといった造船所はアルミ船を得意としています。ツネイシクラフトが粟島汽船向けに建造した双胴旅客船“awaline きらら”は、「シップ・オブ・ザ・イヤー2011」の小型客船部門賞を授賞しました。石田造船は小型ですが特殊な船を建造する技術を持っている。修繕船であれば、ユニバーサル造船因島事業所や三和ドック、向島ドックもある。和船を建造する岡田造船所もある。

船の大きさはそれほど大きくはありませんが、特殊な技術を持った特徴ある造船所が多種多様にあるまちなんです。それに尾道に来たらわかりますが、島同士の距離もそれほど離れていないため、目の前をブロック台船が行き来している風景を身近に見られるのは尾道だけだと思います。

また、尾道海技学院があって、船員養成や海の海洋レジャーの推進を行っていることも海事都市に含まれます。

ほかに漁業協同組合が7つあるのも特徴と言っていいでしょう。水産資源が豊富なことも挙げたい。意外に思うかもしれませんが、尾道は広島県内で水揚げが多いところです。たとえば県内でもっとも多い水揚げは真鯛があります。あさりやタコは1位になったり2位になったりで、太刀魚は2番目ですね」

瀬戸内海を多くの人に知ってほしい

海事都市尾道のために力を入れていることは。

「自治体はソフト面で支援することが主な仕事と思っています。因島技術センターへの支援をしたり、海フェスタでPRしたりしています。子どもたちにも海に向けて関心を持ってほしい。昔、倭寇の時代には、海を縦横無尽に駆け巡って大陸まで行きましたが、それぐらい開拓していくような精神がこれから求められると思っています」

これからどう取り組みたいですか。

「やはり船を絡めさせていきたい。私たちは瀬戸内海というところで恩恵を受けて暮らしている。瀬戸内海を多くの人に知ってもらう。そこにある資源をどうやったら産業を発展させることにつなげられるか、観光産業に向けさせることができるか、というのが私たち行政の課題だと思っています。

広島港に瀬戸内海汽船が運航しているレストランを兼ね備えたクルーズ船“銀河”があります。そういった船が尾道にも入ってもらうことも考えたいものですね。2014年に瀬戸内海が国立公園に指定されて80周年を迎えます。そのとき広島港を母港としている“銀河”が、尾道でも楽しめるとまちのシンボルにもなるでしょう。ゆっくり食事ができて日中遊覧できて楽しめる。それが海事都市の尾道と今治を結ぶのも面白いと思います。

いろいろな案を出しながら、海事関係者の皆さんと一緒に、収益に繋がるような取り組みを考えていきたいと思っています」



プロフィール

平谷祐宏（ひらたに・ゆうこう）

1953年、尾道市向島町岩子島出身。77年山口大学教育学部卒業、84年尾道市立吉和中学校教諭、91年尾道市教育委員会指導主事、98年同委員会学校教育課長、2002年広島県芸北教育事務所所長、03年広島県呉・賀茂教育事務所所長、同年尾道市教育委員会教育長を経て、07年に現職に就任。